

ワーズワスの『序曲』における象徴の使用

——「深淵」と「洞窟」

岩 崎 豊 太 郎

(1) 観念の深淵

William Wordsworth (1770-1850) は “Ode: Intimations Immortality” (1802-1804) を、人間の靈魂の郷里は前世であるというプラトンの靈魂の前世説を基にして書いた。Wordsworth は、この詩に付けた “Fenwick Notes” で、プラトンの前世説に言及して、幼児の靈魂は前世の光栄の名残を留めていること、また幼少時には自分の死が信じられなかったことを述べているが、とくに次のように靈魂の神性を実証しようとして、自己の神秘的な体験を語っている言葉に注目したい。

Many times while going to school have I grasped at a wall or tree to recall myself from this abyss of idealism to the reality. At that time I was afraid of such processes. (*Poetical Works*, iv, p. 463)

Wordsworth は〈現実の世界〉に断層のように突然現出したこのような黙示録的体験を彼の前世説の経験的根拠としている。この神秘的な体験の時、彼はどのような精神状態であったろうか。‘abyss of idealism’ (「観念の深淵」) は、このことを理解する鍵となると思われる。また、少年が恐怖に駆られて壁や木を掴んだことは、‘abyss of idealism’ から〈現実の世界〉へ向かう感覚的な反応を示しており、少年が前世の靈光をまだ保持してはいても感覚的な存在であることを暗示している。

Wordsworth は、1790年のヨーロッパ大陸旅行の際にスイスで、すでにアルプスを越えていたことを知って、アルプスに対する期待を大いに裏切られて、激しい失望感を味わっていた。彼は自叙伝的な長編詩 *The*

Prelude の第 6 巻にこのことを述べた直後に、前述の学童期の神秘的な体験に類似した黙示録的体験を記している。

Imagination — here the Power so called
 Through sad incompetence of human speech,
 That awful Power rose from the mind's abyss
 Like an unfathered vapour that enwraps,
 At once, some lonely traveller. I was lost;
 Halted without an effort to break through;
 But to my conscious soul I now can say —
 'I recognise thy glory:' in such strength
 Of usurpation, when the light of sense
 Goes out, but with a flash that has revealed
 The invisible world, doth greatness make abode,
 There harbours; whether we be young or old,
 Our destiny, our being's heart and home,
 Is with infinitude, and only there;
 With hope it is, hope that can never die,
 Effort, and expectation, and desire,
 And something evermore about to be.
 Under such banners militant, the soul
 Seeks for no trophies, struggles for no spoils
 That may attest her prowess, blest in thoughts
 That are their own perfection and reward,
 Strong in herself and in beatitude
 That hides her, like the mighty flood of Nile
 Poured from his fount of Abyssinian clouds
 To fertilise the whole Egyptian plain.*

(*Prel.* [1850] Bk. 6: 592-616)**

Wordsworth は、突然、孤独な旅人をたちまち包み込む霧のように湧き上がってきて、彼の 'the light of sense' を消して、〈現実の世界〉とはまったく異質の〈黙示録的な世界〉を現出させた圧倒的な 'awful Power' を

‘Imagination’ (想像力) と名付けている。どこからともなく湧き上がった霧は、ここでは黙示録的な想像力の象徴であり、また ‘beatitude’ の象徴である。1805年のテキストでは精神におけるこの力の源泉は直接言及されていないが、1850年のテキストでは ‘the mind’s abyss’ と表わされている。ここでも彼は〈現実の世界〉の断層に出現して、言わば独裁者の感覚に対して ‘usurpation’ (「王位篡奪」) (*Prel.* 6: 533) の革命を行った、想像力が支配する〈黙示録的な世界〉を表すために、‘abyss’を用いている。

Wordsworth は想像力について *The Prelude* の最終巻 13 巻に次のように語っている。

This love more intellectual cannot be
Without Imagination, which in truth
Is but another name for absolute strength
And clearest insight, amplitude of mind
And reason in her most exalted mood.

(*Prel.* Bk. 13: 166-70)

想像力は、感覚を支配し、黙示録的体験をもたらす ‘absolute strength’ であった。A. C. Bradley は、突然訪れた沈黙を単なる音の欠如ではなく、音の ‘active negation’ (Bradley, p. 49, note 1.) と見なしている。想像力は、Bradley の ‘active negation’ のような圧倒的な力であり、さらに Wordsworth の場合には ‘one life’ (*Prel.* Bk. 2: 430), あるいは宇宙の ‘An active Principle’ (*The Excursion* Bk. 9: 3, *Poetical Works*, v.) に従う力であると解釈したい。

また、Wordsworth の想像力は、時間的にも空間的にも無限の世界への広がりを持ち、‘amplitude of mind’ と呼ばれる力であった。

Wordsworth は、未完に終わった三部作の長編詩、*The Recluse* のいわゆる ‘Prospectus’ で、人間の精神は自然と見事に符合することを説いている。現実の世界と永遠の世界を境する山の稜線は、無限の世界への広がりを持ち、‘amplitude of mind’ と呼ばれる想像力の活動する精神の輪郭に相應しい。“The Pedlar” では、主人公が幼年の時に ‘the hills / Grow larger in the darkness’ (21-22) を見た黙示録的体験によって、精神の基盤が築かれたことを特筆しているが、丘の動的輪郭も精神の輪郭のプロトタイプとなり、やがて ‘The measure and the prospect of the soul’ (*Prel.* Bk. 7: 724) を壮大

なものに形成したのであった。山の詩人である Wordsworth において、*The Prelude* の第 1 巻に語られている少年時代のボートのエピソードのように、丘の拡大していく動的輪郭は精神の枠組みが造られていく上で影響を与えたのである。また、彼はその後の少年期において、次のような宇宙の 'one life' との神秘的な合一の体験をもつようになった。

the soul,
Remembering how she felt, but what she felt
Remembering not — retains an obscure sense
Of possible sublimity,
(*Prel. Bk. 2: 334-7*)

前述したように、Wordsworth がアルプスの Simplon Pass に失望した時に、黙示録的な想像力が霧のように湧き上がって意識を包み込んだのであった。この想像力の表出が原体験の 1790 年であったのか、それとも回想時の 1804 年であったのかについてはここでは論じない。ここでは、彼の精神が想像力によって霧のように 'beatitude' に包まれたことによって、失意の精神状態から救済されたことと、魂の神性を啓示する力として想像力を至福のうちに認識したことを強調しておきたい。

Wordsworth は *The Prelude* の最終巻の冒頭に、北ウェールズの Mount Snowdon を登頂したエピソードを記している。彼は山上の幻想的光景が消えた後に、光景を回想して、自然の想像力の宿っていた場所を、1805 年のテキストでは霧の裂け目の 'dark deep thoroughfare' (*Prel. Bk. 13: 64*) として、そこに 'had nature lodged / The soul, the imagination of the whole' (*Prel. Bk. 13: 64-65*) と書いていたが、1850 年のテキストでは 'A fixed, abysmal, gloomy, breathing-place' (*Prel. [1850] Bk. 14: 58*) と修正している。'fixed' という言葉は、想像力の根源を明確に特定できないとしても、その存在を固定化しようとする彼の意図を示している。想像力は 'clearest insight' であり、彼にとって月光による夜景の幻影の真実さについては疑う余地がなかった。

Wordsworth は、Snowdon の幻想的な夜景を次のように想像力が活動する人間精神の象徴として記しており、ここにいわゆる 'Prospectus' に記されている人間の精神と自然とが符合している心象を見ることができる。

When into air had partially dissolved
 That vision, given to spirits of the night
 And three chance human wanderers, in calm thought
 Reflected, it appeared to me the type
 Of a majestic intellect, its acts
 And its possessions, what it has and craves,
 What in itself it is, and would become.
 There I beheld the emblem of a mind
 That feeds upon infinity, that broods
 Over the dark abyss, intent to hear
 Its voices issuing forth to silent light
 In one continuous stream; a mind sustained
 By recognitions of transcendent power,
 In sense conducting to ideal form,
 In soul of more than mortal privilege.

(*Prel.* [1850] Bk. 14: 63-77)

‘infinity’ や ‘transcendent power’ や ‘ideal form’ は神あるいは前世について、‘silent light’ は神あるいは前世の光栄について、また ‘the dark abyss’ は想像力の源泉について暗示を与えてくれる。Wordsworth は、〈現実の世界〉の断層に現出した無限なく想像力の世界〉を表現するために、‘abyss of idealism’, ‘the mind’s abyss’, ‘the dark abyss’ のように、深海、奈落、底知れぬ割れ目や断層を暗示する ‘abyss’ という象徴を用いなければならなかった。

(2) 洞窟の幻想的光景

Wordsworth は *The Prelude* の第 8 巻で、初めてロンドンを訪れた頃に経験した想像力の体験を洞窟の比喩を用いて次のように描写している。

As when a traveller has from open day
 With torches passed into some vault of earth,
 The grotto of Antiparos or the den

Of Yordas among Craven's Mountain tracts;
 He looks and sees the craven spread and grow
 Widening itself on all sides, sees, or thinks
 He sees, erelong the roof above his head,
 Which instantly unsettles and recedes —
 Substance and shadow, light and darkness, all
 Commingled, making up a canopy
 Of shapes and forms and tendencies to shape
 That shift and vanish, change and interchange
 Like spectres — ferment quiet and sublime
 Which after a short space works less and less,
 Till, every effort, every motion gone,
 The scene before him lies in perfect view
 Exposed, and lifeless as a written book!

(*Prel. Bk. 8: 711-27*)

この洞窟の世界は、Wordsworth が当初感覚が精神を支配しているロンドンの〈現実の世界〉に失望したが、やがて力を取り戻した想像力によって救済されたことを暗示している。旅人が日中暗い洞窟に入ると、〈現実の世界〉の断層に入ったかのように、‘The most despotic of our senses’ (*Prel. Bk. 11: 173*) である視覚の機能が停止して、想像力が視覚を支配することになる。この時には、ピューリタン革命やフランス革命によって絶対王政に代わって共和国が樹立されたように、旅人の〈精神の世界〉において、支配者と被支配者との立場が逆転されるいわば‘usurpation’（「王位篡奪」）の革命がなされると言えよう。この結果、先のアルプスの失意の体験のように彼の〈精神の世界〉においては、想像力が視覚の圧政を脱して、視覚を支配する〈黙示録的な世界〉が訪れることになる。

このような〈黙示録的な世界〉においては、感覚は感覚を超えて靈魂の神性の知覚へ止揚し、“Tintern Abbey” (*Poetical Works*, ii, pp. 259-63) で語られているように、‘we are laid asleep / In body, and become a living soul’ (45-46) となるのである。Wordsworth の〈洞窟の世界〉は、黙示録的な想像力が心象を融合して、靈化していく、一連の特異な〈想像力の世界〉を表徴している。

Wordsworth の〈想像力の世界〉の原型は、先に引用した “Fenwick Notes” に記されている学童期の ‘abyss of idealism’ の体験に見い出される。その体験は “Ode: Intimations Immortality” (*Poetical Works*, iv, pp. 279-85) の第 9 連に、 ‘Fallings from us, vanishings’ (144) と表現されている。

詩人は、恐怖の対象となったこの学童期の神秘的な体験を回想して前世の靈魂の啓示を受けて、いま無上の喜びにひたっているのである。

Wordsworth は、シンプロン峠に対する期待と失望の体験の際には、霧が彼の意識を封印するかのよう想像力が生起して、 ‘beatitude’ に包まれて失意から救済された。そのように、彼は 1788 年の秋に初めてロンドンを訪れた時に、乗り込んでいた乗合馬車が市中に入ったと思った時に、突然、次のように首都の重みを衝撃的に感じたが、想像力によって救済されたのであった。

but at the time

When to myself it fairly might be said
 (The very moment that I seemed to know)
 ‘The threshold now is overpast’, great God
 That aught *external* to the living mind
 Should have such mighty sway, yet so it was!
 A weight of ages did at once descend
 Upon my heart — no thought embodied, no
 Distinct remembrances, but weight and power,
 Power growing with the weight! Alas, I feel
 That I am trifling; ’twas a moment’s pause,
 All that took place within me came and went
 As in moment, and I only now
 Remember that it was a thing divine.

(*Prel. Bk. 8: 697-710*)

詩人は、 ‘Power growing with the weight’, つまりロンドンの ‘weight’ に対抗するために増大された想像力の偉大さに比べて、自己の小ささを自覚している。洞窟の ‘making up a canopy’ のための運動は、精神に対する外界の重圧を押し上げる想像力の活動を表徴しており、この洞窟の活動は想

像力が精神を救済するメカニズムを心象化していると言える。このような働きをする想像力は、Coleridge の第 1 の想像力に相当していると思いたい。

この洞窟の ‘canopy’ の心象には、彼が見慣れていた湖水地方の山や丘の輪郭や姿が影響しているのである。Wordsworth にとって、山の稜線は永劫の世界を暗示するものであった。洞窟は拡大していく ‘canopy’ を構築した後、活動を停止する。洞窟の ‘ferment quiet and sublime’ は精神活動の頂点を表している。洞窟が幻想的光景を創り出す活動は、想像力がイメージを融合し、^{アイデアの}理想的形態へ向けて秩序づけて、霊化していく活動を表象していると思いたい。

De Quincey は、Wordsworth が *Lyrical Ballads* 2 版 (1800 年) に発表した短詩 “There was a Boy” (*Poetical Works*, ii, p. 206) に使われている ‘far into his heart’ について、次のようにコメントしている。

This very expression, ‘far,’ by which space and its infinities are attributed to the human heart, and to its capacities of re-echoing the sublimities of nature, has always struck me as with a flash of sublime revelation. (De Quincey, p. 161)

この De Quincey の言葉は、洞窟に構築された枠組みについても当てはまるであろう。想像力の活動が停止しても、その枠組みは ‘a written book’ のように残存する。‘a written book’ は、静謐な〈黙示録的世界〉の枠組みを表徴している。

想像力の活動が頂点に達した後の休止は、新たに想像力が活動する前提となる崇高な静謐の段階となる。Wordsworth が “There was a Boy” に付けた注に記した、‘at the moment when the intenseness of his mind is beginning remit, he is surprized into a perception of the solemn and tranquillizing images which the Poem describes.’ (*Oxford Prel.*, p. 547) という ‘remit’ の段階は、この静謐の段階に相当する。

この洞窟をロンドンの象徴と見た場合には、洞窟の烈しい活動に産業革命によって人口が飛躍的に増大し、様々な思想や商取引などが活発化していた首都のエネルギーを感じることができる。この ‘a written book’ という静謐の段階は、喧噪する〈現実の世界〉と〈黙示録的世界〉との聖なる

〈複合世界〉が〈現実の世界〉の時間の流れの中に断層的に現出した、静止している幻想的な‘a spot of time’であり、その中にはロンドンの〈現実の世界〉が封印されているのである。

Wordsworth は、詩を静謐な時に回想される過去の情緒からおのずから流露する力強い感情と定義している。この二段構えの詩作の原理がこの洞窟の描写にも見られる。この静謐には、力強い感情が内蔵されていると考えたい。静観から力強い感情が自ずから流露するように、やがて洞窟は活動を開始し、内壁に様々な心象が映し出されることが述べられる。この作用は、Coleridge の第 2 想像力を想起させる。

But let him pause awhile and look again
 And a new quickening shall succeed, at first
 Beginning timidly, then creeping fast
 Through all which he beholds.
 (Prel. Bk. 8: 728-31)

(3) 個人の精神の尊重

Wordsworth は、英国湖水地方の住人の精神に独立心の原型^{アーキタイプ}を見いだした。彼は、Grasmere を住人の人間性が尊重されている、地理的にも周囲が山々で囲まれた理想的な社会と見なしていた。

抒情詩“Resolution and Independence” (*Poetical Works*, ii, pp. 235-40) では、スコットランド生まれのヒル取りを生業としている老人の不屈な独立心によって印象づけられた体験が語られている。この老人は、まさに‘the visionary dreariness’を体現した人物であった。また、Wordsworth は“Simon Lee” (*Poetical Works*, iv, pp. 60-64) で老人の自立心を描いている。

Simon Lee は英国南西部の Alfoxden に住んでいた。彼は領主の狩りの勢子^{せこ}の仕事をやめてから、荒れ地を開墾して作った畑を耕して貧しく暮らしていた。彼は、若いときには人並みはずれた脚力の持ち主であった。今では領主をはじめ、彼の一緒に狩りをした仲間たちも、猟犬もみな他界していた。詩人は、80 歳にもなろうかという老人がもつれた枯れ木の根を掘り起こそうとして、懸命につるはしを打ち下ろしているのを見た。詩人は、老人がむだ骨を折っている姿に同情して、つるはしを借りるとその根を一撃で断ち切った。この行為に対して、老人は涙を浮かべて、感謝と賞賛の

言葉を止めどなく述べたのである。‘Alas! the gratitude of men / Hath oftener left me mourning’ (95-96) という最後の2行は、詩人が老人から思いがけなく、あまりにも感謝されたことによって、老衰の不可避さをあらためて認識しただけでなく、自分の行為が老人の独立心を損なったのではないかという危惧の念にかられたことを表している言葉と解釈したい。畑仕事は、Simon Lee にとって、非常に過酷ではあったが、他方ではそれが奪われると生き甲斐も奪われてしまう存在であったのだ。この詩を Wordsworth が老人の社会問題を扱った作品と見なしたい。Coleridge が Wordsworth をきわめて男性的と評したが、その言葉はこの作品においても頷ける。

Wordsworth の想像力論は個人の独立心を尊重する特徴をもつ。

Imagination having been our theme,
So also hath that intellectual love,
For they are each in each, and cannot stand
Dividually. Here must thou be, o man,
Strength to thyself — no helper hast thou here —
Here keepest thou thy individual state.
No other can divide with thee this work,
No secondary hand can intervene
To fashion this ability. 'Tis thine,
The prime and vital principle is thine
In the recesses of thy nature, far
From any reach of outward fellowship,
Else 'tis not thine at all. But joy to him,
Oh, joy to him who here hath sown — has laid
Here the foundation of his future years —

(*Prel. Bk. 13: 185-99*)

Wordsworth は、このような個性を主張する想像力論の持ち主であったために、Keats や Hazlitt によってエゴティスティカルな詩人と批評されたのである。

引用の中の ‘no helper hast thou here’ という言葉に表されている孤高

な精神や独立心は、次の詩行にも見られる。

I was left alone
Seeking the visible world, nor knowing why.
The props of my affections were removed,
And yet the building stood as if sustained
By its own spirit!

(*Prel. Bk. 2: 292-96*)

Wordsworth はこの詩行で、少年の頃にただ一人で外界を追求するようになったこと、また自然に対する愛情がすでに形成されていたことを建物の比喩を用いて語っている。

彼は Cambridge 大学に進学してからも、湖水地方の自然の中で構築された内心の風景が明確な存在性をもっていたことにより、精神の救済がなされたのであった。

Unknown, unthought of, yet I was most rich,
I had a world about me — 'twas my own,
I made it; for it only liv'd to me
And to the God who looked into my mind.

(*Prel. Bk. 3: 141-44*)

彼は Cambridge の学生時代に大陸旅行から 1790 年 10 月に帰り、翌年の 1 月に卒業しているが、その約 3 ヶ月の間大学の建物に守られて学ぶ生活よりも、'pitched my vagrant tent' (*Prel 7: 60*) と述べているように、彼は束縛される大学生活を嫌って、むしろ学外に仮宿の独立した生活を求めたのであった。

Bradley は、'Partly because he is the poet of mountains he is, even more pre-eminently, the poet of solitude' (Bradley, p. 141) と述べており、また John Blades も 'solitude is an essential element in communication with the spirit of nature' (Blades, p. 27) と書いている。Wordsworth が孤独の詩人である点に関しては、過去の研究者も現在の研究者も意見が一致しているのである。

Wordsworth は、*The Prelude* の第 1 巻に、人間の精神が相異なる要素を音楽のように一つに調和させる作用について、次のように書いている。

The mind of man is framed even like the breath
 And harmony of music; there is a dark
 Invisible workmanship that reconciles
 Discordant elements, and makes them move
 In one society.

(*Prel. Bk. 1: 351-55*)

彼は、人間精神が一定の枠組みの中で過去の情緒や心象を音楽のように一つに調和していく神秘さに驚きを禁じ得なかった。詩人たちはそれぞれ独自のリズムで創作活動を行う。先の洞窟の比喻では、内壁の運動が静止して静謐が訪れた時に ‘a written book’ がつくられていたことが述べられている。静謐は嵐の前の聖なる静けさにもたとえられよう。洞窟はやがて運動を活発に再開するが、その運動は嵐のような破壊的な混乱を生み出すのではなく、幻想的な光景を創造していく。幻想的な光景は、‘a written book’ の内容が律動的に洞窟の壁面に映し出されたものと見なしたい。このような洞窟は、Stourhead の庭園や、Twickenham の Pope の庭園などに作られたピクチャレスクな洞窟を連想させる。この Wordsworth の洞窟には、霊肉二元論の立場から描写されているところに特徴がある。

Wordsworth が ‘my vagrant tent’ を張ったことは、洞窟の幻想的な ‘canopy’ を構築するリズムのように、自分自身の精神のリズムに従うことでもあった。このリズムは彼独自のものであって、他者は干渉することはできない。ロンドンには、彼にとって個性のリズムを圧殺してしまう所であった。

‘my vagrant tent’ の空間は前述した洞窟の ‘canopy’ の空間を連想させる。‘a mansion for all lovely forms’ (“Tintern Abbey” 140) や ‘interminable building’ (*Prel. Bk. 2: 402*) のような心象の館や、‘vagrant tent’ や、洞窟の ‘canopy’ は、他人の立ち入れない私的な世界であり、彼の個性を守る砦の象徴であった。

洞窟は、活動を休止した後、ロンドンの過去と現在についての幻想的な光景を生み出したが、そのように Wordsworth は 1790 年の徒歩旅行でア

ルプスに失望したエピソードを記述した後に、‘slackening’ (*Prel. Bk. 6: 549*) という言葉を使っているのに注意したい。この‘slackening’は、洞窟の活動の休止に相当する。*The Prelude* では、精神の‘slackening’に続いて、Gondo 溪谷の崇高な景観が想像力によって描写されている。

活動の‘slackening’は、嵐の前の静けさのように、彼の精神的エネルギーがリズムに乗って力強い感情を流出させる前段階となる。Coleridge の“Kubla Khan”や Shelley の“Ode to the West Wind”では、激しい創作のエネルギーが詩人の魂から発するリズムとなって迸り出ている。

(4) 精神の救済

Wordsworth が静謐な時に回想される過去の情緒から自発的に流露する力強い感情を詩としたように、彼の詩作の原理は二段構えの過程で構成されている。この静謐な時は、決して安息の時ではなく、程度の差はあるが、想像力という‘absolute strength’が、‘clearest insight’や、‘amplitude of mind’や、‘reason in her most exalted mood’を発揮して、〈現実の世界〉に対して‘active negation’をするために精神的エネルギーを言わば一触即発の状態で満している時であると言える。

Wordsworth の第 1 の‘spots of time’のエピソードは、彼がまだ 6 歳にならない頃ペンリスの侘びしい丘で、言葉や色彩では表現できない‘the visionary dreariness’ (*Prel. Bk. 11: 310*) を知覚したことを語っている。‘the visionary dreariness’は、〈現実の世界〉における侘びしさではなく、それに対して‘active negation’がなされた、〈想像力の世界〉における侘びしさである。第 1 の‘spots of time’は、彼の想像力の第 1 段階を表徴する。この時期においては、幼児は前世の光栄を残存しており、‘the visionary gleam’ (*Immortality Ode* 56) に包まれている。‘the visionary dreariness’に包まれた世界は、幼児が道に迷った時に、彼の‘the visionary gleam’に包まれた〈現実の世界〉に断層的に現出した想像力の‘Fallings from us, vanishings’ (*Immortality Ode* 144) の体験であり、彼はそれに対して本能的に不安や恐怖を抱いたのであった。

第 2 の‘spots of time’のエピソードには、Wordsworth が Hawkshead Grammar-school の生徒であった 13 歳の時に、クリスマス休暇で帰宅する嵐の夜に、街道の分岐点が見渡せる侘びしい高所へ登って、迎えの子馬を待ちわびていたことが書かれている。彼の父親はその休暇に急死した。

彼は、自分が父親を殺したような罪悪感に囚われたのであった。父親の死によって、‘the visionary gleam’に包まれていた彼の〈現実の世界〉に罪の意識が侵入したと言える。

クリスマス休暇の後、彼は父親を亡くした孤児となったが、彼が子馬を待った夜に見た風景は本質的には少しも変わらなかった。彼は人間と自然に介在するこの不条理に直面して死や悲哀や罪について考えるようになった。あの夜景は、父親の生前と死後を境する心象として、換言すれば、〈無垢の世界〉と〈現実の世界〉とが合一した〈複合世界〉の心象として記憶された。Bradleyはこの夜景について‘Everything here is natural, but everything is apocalyptic’ (Bradley, p. 134)と述べている。第2の‘spots of time’は、〈無垢の世界〉が死と罪によって否定されていく彼の想像力の第2段階を表徴するエピソードである。また、“There was a Boy”の「私」もこの時期に入るのである。

Wordsworthが大陸旅行から帰国後、大学の伝統ある建物の代わりに選んだ‘my vagrant tent’は、石造りの建物に比べて不安定で虚弱であるが、柔軟であり、洞窟が構築した天蓋のように、また霧のように、流動的な可能性を秘めている。‘my vagrant tent’の世界は、彼の〈想像力の世界〉にとって相応しいものであった。‘my vagrant tent’や、洞窟の天蓋や、霧は、〈現実の世界〉の有限性を否定する心象として機能するのである。

Wordsworthの詩作における意識の流れは〈現実の世界〉の有限性を否定する過程を通る。洞窟が天蓋を形成したことが、彼の精神がロンドンの〈現実の世界〉の重圧を克服したことを表徴するように、想像力は霧のように感覚を〈想像力の世界〉に封印することによって、精神を感覚から救済する役目を司る。洞窟の活動が頂点に達してから休止して、‘a written book’のようになったことは、Wordsworthの詩作の原理における過去の情緒を回想する静謐な精神状態に相当する。この静謐な時は〈現実の世界〉の時間における断層となる。

二つの‘spots of time’のエピソードは、前世の幻想的な輝きに包まれていた少年時代の〈現実の世界〉の断層から湧き上がった黙示録的な想像力の体験であった。‘spots of time’の記憶は、彼がほとんど喪失していた一種の楽園の回復をもたらす役目を果たしたのである。Wordsworthは、想像力によって宇宙の‘An active Principle’に従って活動しようとするが、拠り所とする幼少期の記憶が次第に薄れていき、〈現実の世界〉に‘beatitude’

をもたらした黙示録的想像力が弱まっていくことを予想していた。

Oh, mystery of man, from what a depth
 Proceed thy honours! I am lost, but see
 In simple childhood something of the base
 On which thy greatness stands — but this I feel,
 That from thyself it is that thou must give,
 Else never canst receive. The days gone by
 Come back upon me from the dawn almost
 Of life; the hiding-places of my power
 Seem open, I approach, and then they close;
 I see by glimpses now, when age comes on
 May scarcely see at all; and I would give,
 While yet we may (as far as words can give)
 A substance and a life to what I feel —
 I would enshrine the spirit of the past
 For future restoration.

(*Prel. Bk. 11: 328-42*)

Wordsworth の詩は、基本的に、‘spots of time’ の第 1 のエピソードにおいて ‘the visionary dreariness’ として表徴されている無限なく想像力の世界へ収斂するリズムを持っていると言える。この ‘the visionary dreariness’ の感情は、‘Immortality Ode’ の終結部では次のように表現されている。

The Clouds that gather round the setting sun
 Do take a sober colouring from an eye
 That hath kept watch o’er man’s mortality;
 Another race hath been, and other palms are won.
 Thanks to the human heart by which we live,
 Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
 To me the meanest flower that blows can give
 Thoughts that do often lie too deep for tears.

(‘Immortality Ode’ 197-204)

Wordsworth の精神における〈詩の世界〉は、〈現実の世界〉と〈黙示録的世界〉が複合された世界として特徴づけられる。彼の想像力は、幼児の無垢な魂がまとっていた前世の栄光の喪失から人間の靈魂の偉大さへの啓示に導びく力であった。

Wordsworth は、黙示録的想像力によって自然界のようなく現実の世界〉から〈理想的^{イデアの}世界〉へ到達するための路を選んだ。Snowdon の幻想的な夜景のように、洞窟の幻想的な光景は学童期に体験した‘abyss of idealism’や、アルプス越えの回想における‘the dark abyss’の〈黙示録的な世界〉についての暗示を与えてくれる。‘abyss’は、幼少年の〈現実の世界〉であろうと、成人の〈現実の世界〉であろうと、そこから〈黙示録的世界〉が現出する〈現実の世界〉の断層である。Wordsworth の心象群は‘a real solid world / Of images about me’ (Prel. Bk. 8: 604-605) であり、とくに‘the dark abyss’, ‘dark deep thoroughfare’, ‘abyss of idealism’, また‘the mind’s abyss’の心象群は、*The Prelude*において〈黙示録的世界〉の象徴として機能している。

プラトンは理性の思考によって〈現実の世界〉をイデア界に救い上げようとしたが、Wordsworth は黙示録的想像力によって〈黙示録的世界〉の中に〈現実の世界〉を内包することにより、感覚の精神に対する支配を否定して、精神を救済しようとした。洞窟の象徴で見たように、彼の黙示録的想像力には、ある意味では‘usurpation’ (「王位篡奪」^{きんぼつ}) のような革命的な内部構造が潜在化されている。彼は、“London, 1802” (*Poetical Works* iii, 116) においては、ピューリタン革命で活躍した Milton に呼びかけて、理想的な社会が到来するために、助力を祈願しているのである。

注

- * 筆者による日本語訳を文末（附）に掲げる。
- ** ここでは Jonathan Wordsworth 編の *The Prelude* の 1850 年のテキストを用いているが、以後、特記しない場合は、*The Prelude* からの引用は同書の 1805 年のテキストによる。引用の数字は巻と行の意味である。）

Works Cited

- Blades, John. *Wordsworth and Coleridge: Lyrical Ballads*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2004.
- Bradley, A. C. *Oxford Lectures on Poetry*. London: Macmillan, 1965.
- De Quincey, Thomas. *Recollections of the Lakes and the Lake Poets*. Ed. David Wright. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- Wordsworth, William. 'The Pedlar', 'Tintern Abbey', and 'The Two-Part Prelude'. Ed. Jonathan Wordsworth. Cambridge and New York: Cambridge UP, 1985.
- Wordsworth, William. *The Poetical Works of William Wordsworth*. Ed. E. de Selincourt and Helen Darbishire. 2nd ed. 5 vols. Oxford: Clarendon, 1940-49.
- Wordsworth, William. *The Prelude, or Growth of a Poet's Mind*. Ed. E. de Selincourt. 2nd ed. Rev. Helen Darbishire. Oxford: Clarendon Press, 1959.
- Wordsworth, William. *The Prelude: The Four Texts (1798, 1799, 1805, 1850)*. Ed. Jonathan Wordsworth. Harmondsworth: Penguin Books, 1995.

附

(本稿に引用した Wordsworth の詩の日本語訳。筆者による。左の数字は本稿におけるページを表す。)

- 2 想像力が—悲しいことに人間の言葉が
不十分なので、ここではこの言葉で表すのだが—
あの恐るべき力が精神の深淵から湧き上がってきた。
まるでどこからともなく現れて、孤独な旅人を
たちまち包み込む霧のように。私は呆然自失して
立ち止まったが、抜け出そうとしなかった。
私はいま、意識の回復した魂に話すことができる—
「あなたの光栄を認める」と。目に見えない
世界を顕わす閃光のみを発して、感覚の光が
消える時の、そのような篡奪さんだつの力にこそ、
私たちが青年であれ、老人であれ、
偉大な存在は、住まい、安らぐのだ。
私たちの運命や、心情や、故郷は、
無限とともにまた無限にのみ存在する—
希望と、それも決して死滅しない希望と、
努力と、期待と、願望と、
常に存在しようとするものとともにあるのだ。
魂は、このような戦いの旗のもとには—

戦利品を得ることも、武勇を誇示するために
掠奪品を争うこともない—

魂は、成就し報われる思想において祝福され、
自ら自身において、またアビシニアの雲を
泉として、エジプト全土に肥沃をもたらす
ナイルの強大な氾濫のように、
自らを隠してしまう至福において、力強いのだ。

(1850年『序曲』6巻592-616行)

- 3 このいっそう知的な愛は、
想像力があってはじめて存在し得るもの。
想像力は、事実、絶対的な力、
もっとも明敏な洞察力、精神の横溢、
もっとも高揚した気分にある理性の別の呼び名である。
(『序曲』13巻166-70行)

- 4 魂は—
どのように感じたのかを覚えていたが、なにを感じたのかを
覚えていなかった—可能な崇高へのばく然とした
意識を留めていた。
(『序曲』2巻334-37行)

- 5 夜の精と三人の登山者の眼前に浮かんだ
幻影の一部が大気の中に消えた後に、
平静な思いのうちに幻影を回想していると、
その幻影は、荘嚴な知性の表象にも、
その活動や領域にも、その所有し
熱望するものにも、その本質にも、
また、なろうとするものにも思われた。
そこに、永劫を糧として、
暗黒の深淵の上で瞑想しながら、
いくつもの声が途切れない一つの流れとなって
無言の光に向かって昇るのを一心に聞いている
精神の象徴を、また、超絶的な力の認識に
支えられているために、感覚は理想的形態へ導かれ、
魂は人間以上の権利を付与されているような、
精神の象徴を見た。

(1850年『序曲』14巻63-77行)

- 5-6 一人の旅人が、明るい外の世界から
 松明を灯して、アンティパロスの洞窟か、
 クレイヴン山岳地帯のヨーダスの洞窟か、
 あるいはどこか地中のアーチ型屋根の洞窟に入った時に、
 洞窟が拡張し、拡大しながら、四方八方に
 広がるのに目を向けて、見る。
 やがて、たちまち揺らいで退いていく頭上の天井が一
 実体と影が、光と闇が、すべて合体されて、
 形態と形状の、また形が幽霊のように
 移動しては消え、変化しては入れ替わる傾向の、
 一つの天蓋を作り上げるのを見る、
 あるいは見るように思う—
 静穏で崇高な動乱は、まもなく次第に弱まり、
 やがて努力や動きは、すべて消滅して、
 眼前のものは、彼の視線に完全にさらされて、
 書かれた本のように生命がなく存在する。
 (『序曲』8巻 711-27行)

- 7 しかし、
 「いま都の入り口を通過した」と、
 自分に告げてよいと思われた時に、
 (そう気づいた瞬間に)、
 外界の事物が生きている人の心をあのように
 強く支配してしまうとは。それがまさに起きたのだ。
 幾代の重圧がたちまち私の心に
 のしかかった—具体的思想や
 明瞭な記憶ではなく、重圧と力が、
 重圧によって増大された力が。ああ、なんと私自身が
 取るに足らなく感じられるのか。一時休止した後に、
 心に生じたすべてのものが瞬時のように
 現れて消えていった。私は今、
 それは神聖であった、と思い起こしている。
 (『序曲』8巻 697-710行)

- 9 しかし彼をしばらく休息させてから、再び見させなさい。
 新しい胎動が続いて起こり、最初は
 おずおずと始まるが、それから彼が見るすべての物に
 急速に運動が広がっていく。

〔序曲〕8巻728-31行)

- 10 想像力は私たちの主題であったが、
 あの精神的愛もそうであった。なぜなら
 両者はおのおのの中であって切り離せないのだから。
 ああ、人間よ、あなたはここに存在しなければならない。
 力を尽くしなさい—ここでは助ける人はいないのだから—
 ここでは自分が自分を保つのだ。
 どのような他者もこの仕事にあずかれないし、
 またどのような代行者もこの能力を造るために
 介入できないのだから。それはあなたのものなのだ。
 第1の重大な原則はあなたのものであり、
 あなたの本性の奥深く、外からの交友の手から
 遠く離れているのだ。そうでないならまったく
 あなたのものではないからだ。だが、喜ばしいのは、
 ああ、ここに種を蒔いた人なのだ—喜ばしいのは、
 ここに将来の基盤を築いた人なのだ—

〔序曲〕13巻185-99行)

- 11 私は理由は分からなかったが、
 ただ一人でこの目に見える世界を追求するようにさせられた。
 私の愛情の支柱は取り除かれても、
 建物は、まるでそれ自身の精神によって
 支えられているように立っていた。

〔序曲〕2巻92-96行)

- 11 知られたり、想われたりはしなかったが、私はもっとも豊かだった—
 私の周囲には一つの世界があった—それは私自身のものであり、
 私が造ったものなのだ。なぜならそれは私と、
 私の心を洞察される神にだけ生きていたのだから。

〔序曲〕3巻141-44行)

- 12 人間の精神は、まさに音楽の息吹や
 旋律のように形づくられている。
 不協和音の要素を調和して、それらを
 一つの共同体として運動させる、暗く目に見えない
 手ざわが存在している。

〔序曲〕1巻351-55行)

- 15 あゝ、人間とは神秘的なもの、どのような深みから
 あなたの榮譽が生じるのか、私には分からない、
 だが、あなたの偉大さの基盤^{ベース}を無邪気な
 幼児期に見るのだ—私は、こう感じている、
 あなた自身から与えられるのに違いないと、
 そうでないなら決して受け取ることができないのだから。
 過去の日々がほとんど人生の暁のころから蘇ってくる。
 力の隠れ家の扉が開かれたように思われて
 近づくと、閉じてしまう。
 今はかすかに見えていても、歳月が経つと
 まったく見えなくなるかもしれない。
 そのために、可能な時に、言葉によってできるだけ
 私の感じることに実体と生命を授けたい、
 過去の魂を将来における回復に備えて
 祀りたい。

(「序曲」11 卷 329-43 行)

- 15-16 沈みゆく夕日をかこむ雲は、
 人間の死すべき運命を見てきた目に
 落ち着いた色調を帯びて映る。
 人生の路を他方に進み、他の榮譽が得られた。
 私たちの生きる支えとなる人情のおかげで、
 そのやさしさや、喜びや、恐怖のおかげで、
 ごくつつましい咲く花もしばしば私に
 涙よりも深い想いを与えてくれる。

(「靈魂不滅の賦」197-204 行)